

## 第6学年 国語科学習指導案

平成24年11月8日(木) 第5校時  
場所 6年教室 指導者 遠藤 隆一

自己テーマ	単元を貫く課題設定と言語活動を通して、思考力・判断力・表現力を育てる授業
-------	--------------------------------------

### 1 単元名 人物の生き方を考えながら読もう 「海のいのち」 立松 和平

### 2 単元設定の理由

本学級の児童は、学力調査等の結果や授業の様子から人物の心情を叙述と関係づけて読み取る力は不十分である。また、国語の授業における話すこと・聞くことの言語活動では、進んで自分の考えを発表できる児童は限られている。その一方で「学級の女子はなかなか発表しない。」といった私の見方は、実は一部の児童たちだけで授業を進めていた私に大きな課題があると思うのである。そこで、単元及び単位時間における話す・聞く、書く、読むの言語活動を位置づけ、児童一人一人が自分の考えをもち、他の児童の考えを聞いて気づいたこと、考えが変わったことを加えて、自分の考えを広げたり深めたりできるようにしたいと考える。

本教材は、中心人物である太一が、父や与吉じいさなど周りの人物との関わりの中で漁師としての生き方や海に対する考え方を学び成長していく物語である。太一を軸に人物の関係をおさえながら読み、物語が自分(読み手)に語りかけてきたことを考え、自分の言葉で表現する力をつけることをねらいとしている。そして、人間が成長していく過程には人との関わりが重要であるということに気づかせ、児童自身が自分の生き方を見つめ直すきっかけとなればと考える。

本単元の指導にあたっては、つかむ段階では作品の設定やあらすじを確かめ、文章構成をつかませる。次に、伝え合う段階では、中心人物である太一と父や与吉じいさがどのように関わり合い、互いにどんな気持ちを持っているかを叙述に即して読み取らせ、太一の成長を考えさせる。特に、クエを打たなかった太一の心情の変化をクエや父、与吉じいさの行動や言葉と関係づけて読み深めさせる。そして、まとめる段階では、「海のいのち」の主題について、太一の成長の読み取りを活かしながら、自分の考えをまとめさせる。

### 3 育てたい思考力・判断力・表現力

- 登場人物の関係をとらえ、考え方や生き方を叙述の言葉や行動、様子から読み取る力 (思考力)
- 根拠を明確にして、中心人物の考えや心情の変化をつかむ力 (判断力)
- 書く活動と話し合い活動を通して、自分の考えを広げたり深めたりする力 (表現力)

### 4 単元における指導内容

- 物語に興味を持ち、物語が自分に最も強く語りかけてきたことを考えながら読もうとしている。(国語への関心・意欲・態度)
- 場面の様子や情景が伝わるように音読している。(読む能力ア)
- 場面構成や人物の関係を手がかりに、中心人物の変化を読み取り、物語が最も強く語りかけてきたことをとらえている。(読む能力エ)
- 物語を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりしている。(読む能力オ)
- 自分が感じたことが相手に伝わるように、構成や文章表現に気をつけてまとめている。(書く能力ウ)

## 5 「言語活動」の充実の工夫

### ○ 学びがいのある魅力的な学習課題

単元のつかむ段階において、児童の初めの感想をもとに題名である『海のいのち』とは何か、「なぜ太一はクエを打たなかったのか。」という主題につながる学習課題をもたせる。その上で、中心人物の太一の成長を読み取るという単元を貫く学習課題を設定し、父や与吉じいさの言葉や行動から、太一が「海」に対する考え方や「漁師」としての生き方を学び成長していく姿を読み取らせる単位時間の学習課題を提示していく。

＊初めの感想の視点（思ったこと・感じたこと、疑問に思ったこと、「海のいのち」の意味）

### ○ 教師によるコーディネート

自分の考えを書く活動や互いの考えを理解したり共有したりする話し合い活動を通して、多様な考えを引き出す教師の働きかけを行う。

- ・ 発問を精選し、児童の思考力を働かせる。
- ・ 書く活動では、机間指導を通してキーワードをとらえさせる。
- ・ 話し合い活動では、相手の考えをノートに書き加えさせることで考えや意見を共有させる。
- ・ 一人調べ（家庭学習にて）を通して、課題に対する児童の考えをとらえ、さらに考えを広げさせるような言葉かけ（朱書き）をする。
- ・ 児童の考えを見取り、ねらいに迫るために意図的指名により児童の考えをつないでいく。

### ○ 親和的な学級集団

児童一人一人の考えを認め合い、称賛し合う雰囲気のある学習環境をつくる。

- ・ 発言の仕方、聞く態度等のルールを確認する。
- ・ 互いの考えのよさを認め合ったり称賛し合ったりする機会を設定する。

## 6 学習・評価計画（別紙）

## 7 本時のねらい

- クエを打たなかった太一の心情の変化をクエの様子や父、与吉じいさの生き方とを関係づけながら考えることができる。

## 8 指導過程（別紙）

## 9 板書事項（別紙）

8 指導過程

段階	学習活動・内容	時間	○指導上の留意点 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">評価</span>
つかむ	<p>1 本時の課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>なぜ太一はクエを打たなかったのだろうか。</p> </div>	5	<p>○ 第5場面の太一的心情やクエの様子分かる叙述の取り出しを確かめ、本時の学習課題をつかませる。(掲示)</p>
よむ	<p>2 学習場面を音読する。                      ◇一斉読み(5場面、形式段落21～27)                      ◇指名読み(形式段落25～27)</p> <p>3 クエを打たなかった太一的心情を読み、話し合う。                      (1) 太一がクエを打たないことを決めたのは、どこだろう。                      ・この魚をとらなければ、本当の漁師にはなれないと泣きそうになり…                      ・太一はふっとほほえみ…もう一度えがおを作った。                      ・「おとう、ここにおられたのですか。また、会いに来ますから。」</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>(2) なぜ太一はクエを打たなかったのだろうか。                      ・おだやかな目。自分に殺されがっている。こんな感情は初めて。                      ・「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」からクエと父が重なった。                      ・海の生き物全てが海のいのち。その象徴が瀬の主。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>太一はクエの姿に自然の偉大さや父や与吉じいさの生き方を感じ、打たないと決心したから。</p> </div>	30	<p>○ 教師の範読で始まり、一斉読み、指名読みの音読をさせる。</p> <p>○ 太一が三度めに海にもぐったときの、クエの様子が変化したことに気づかせる。</p> <p>○ 太一のクエを打つことに対する葛藤に気づかせる。</p> <p>○ 太一のクエに対する見方が大きく変わったことに気づかせる。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>○ 前時までの太一的心情の変化や登場人物を関係づけながら考えさせる。</p> <p>○ クエの姿を見て、太一はクエを父以上の存在「海のいのち」と感じていることを考えさせる。</p> <p>○ 考えを書く活動から意図的指名によって、読みを広げさせる。</p> <p>○ 自分の考えを理由、根拠となる言葉や文をもとに発表させる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>太一的心情の変化を登場人物の様子や生き方と関係づけながら考えることができる。(ノート、発表)</p> </div>
まとめる	<p>4 学習のまとめをする。                      (1) 太一の成長の記録を書く。                      例「クエを海の生き物の命と思い、父や与吉じいさの生き方と重ねたことで、クエの命を守ることで一人前の漁師へと成長した太一」                      (2) 音読をする。</p>	10	<p>○ キーワードをとらえることができるように、板書を工夫する。</p> <p>○ 話し合いでの考えや意見をもとにまとめさせる。</p>

6 学習・評価計画（総時数10時間、本時8／10）

時	学習内容	観点別評価基準			
		関心意欲態度	話す・聞く	書く	読む
つかむ	1 教材の範読を聞き、音読をする。新出漢字、語句を学習する。				教材を覚えるくらいまで音読をする。（課題とする）
	2 初めの感想を書き、交流をする。			書く視点をもって初発の感想を書く。	
	3 キーワード（会話文）を手がかりに文章構成を確かめ、学習の見通しをつかむ。				「設定・展開・山場・結末」をとらえる。
伝え合う	4 父のような漁師になりたい太一の成長を読み取る。	太一の成長を読み取る（単元を貫く学習課題）			父のような漁師になりたい太一の成長を読むことができる。
	5 与吉じいさに弟子入りし漁師としての生き方を学んだ太一の成長を読み取る。				与吉じいさの考えを学んだ太一の成長を読むことができる。
	6 与吉じいさの死を受け入れ海で生きていく決心をした太一の成長を読み取る。				海で生きていくことを決めた太一の成長を読むことができる。
	7 漁師として自信を身に付け父の海にもぐり続ける太一の成長を読み取る。				父の敵を討つため海にもぐる太一の成長を読むことができる。
	8 クエを打たなかったことで海の命に気づいた太一の成長を読み取る。 本時				クエを打たなかった太一の漁師としての成長を読むことができる。
9	父や与吉じいさの生き方を受け継ぎ海の命を守り続ける太一の成長を読み取る。			村一番の漁師であり続けた太一の成長を読むことができる。	
まとめる	10 「海のいのち」の主題について、自分の考えをまとめる。			自分の考えが相手に伝わるように書くことができる。	

## 10 授業の実際

「言語活動」の充実の工夫についての考察

### ① 学びがいのある魅力的な学習課題

中心人物の太一の成長を読み取るという単元を貫く学習課題を設定し、毎時間の学習のまとめとして「太一の成長の記録」を書いた。毎時間の自分の学びや自分の考えの変化を評価することができた。

資料 1

#### ある子どものノート「太一の成長」から \*

4 時め. 大物をしとめられるのも、海のめぐみだというを父から学んだ太一。

5,6 時め. 必要以上に魚をとらなければ、海で共に生きていけるということを与吉じいさから学んだ太一。

7 時め. 20キロぐらいのクエには興味をもたず、父を殺した瀬の主を追い求めている太一

8 時め. 瀬の主を追い求めているが、父や与吉じいさの海を大切にするという考え方を感じ、クエを殺さなかった太一。

8 時め. 海のいのちを守るということで、本当の一人前の漁師になった太一。(再授業)

9 時め. 与吉じいさの教えを受けつぎ、海のいのちを守る一人前の漁師になった太一。

一方、単元を貫く学習課題のとらえ方として、単元の最終的な言語活動を設定することで、それに向かって教材文を読み取る単位時間の学習課題が決まるのではないかと考えられる。例えば、海のいのちが自分に最も強く語りかけてきたことについて考えたことを「読書紹介カード」や「帯」を作成し友達等に伝える（相手意識）ために、教材文海のいのちを読むという目的意識を持たせることができるであろう。

### ② 教師によるコーディネート

自分の考えを書く活動や互いの考えを理解したり共有したりする話し合い活動を通して、多様な考えを引き出す教師の働きかけとして以下のことを実践した

ア. 発問を精選し、児童の思考力を働かせる。

第1の発問

Q:「太一がクエを打たないと決めたのはどこだろう。」「その理由は?」に対して、

A:「クエを父と思ったから。」

という子どもの「クエを父と思ったから。」は、主発問「なぜクエを打たなかったのだろうか。」に対する考えとして、予想していたものであった。教師自身の考えていた授業展開がここでストップしてしまった。そして、子どもの思考をもストップさせてしまった。

これは、太一と瀬の主のクエ（大魚）が対峙した際の大魚の様子から太一の心情を表す言葉、文を時系列に読むことで、太一の心情が大きく変わる「泣きそうになり…」から「ほほえみ」のクライマックス部分をおさえることで、前部の太一が「打ちたくても打てない。」と葛藤の場面を想像させることで、主発問の「なぜクエを打たなかったのだろうか。」と発問すべきであった。また、この発問に向かうまでの補助発問もしっかり吟味すべきであった。

そこで、この授業の反省をもとに、再度授業案を作成し再授業を実施した。(以下の指導案)

8 指導過程＜\*訂正版＞

段階	学習活動・内容	時間	○指導上の留意点 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">評価</span>
つかむ	<p>1 本時の課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>なぜ太一はクエを打たなかったのだろうか。</p> </div>	5	<p>○ 第5場面の太一的心情やクエの様子分かる叙述の取り出しを確かめ、本時の学習課題をつかませる。(掲示)</p>
よむ・ひらける	<p>2 学習場面を音読する。                  ◇一斉読み(5場面、形式段落21～27)                  ◇指名読み(形式段落25～27)</p> <p>3 クエを打たなかった太一的心情の変化を読み、話し合う。                  (1) なぜ太一は、「…泣きそうになりながら思う。」のか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・瀬の主は全く動こうとせず</li> <li>・おだやかな目</li> <li>・大魚は殺されたがっている</li> <li>・こんな感情になったのは初めて</li> </ul> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>(2) なぜ太一は、「おとう、ここに…また会いに来ますから。」とクエに向かっておとうと呼びかけたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大魚＝父と重ねることで殺さずにするから。</li> <li>・大魚はこの海のいのち</li> <li>・海の生き物全てが海のいのち。その象徴が瀬の主と思えたから。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>太一はクエの姿に自然の偉大さや父や与吉じいさの生き方を感じ、打たないと決心したから。</p> </div>	30	<p>○ 教師の範読で始まり、一斉読み、指名読みの音読をさせる。</p> <p>○ 太一のクエに対する見方が大きく変わるクライマックスを予想させる。                  泣きそうになり…→ほほえみ、笑顔</p> <p>○ 「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれない…」から、クエを打てない心の葛藤に気づかせる。</p> <p>○ 打ちたくても打てない理由と根拠(叙述から)を話し合わせる。</p> <p>○ 瀬の主は打たれることも受け入れるような海の大きな存在という思いに太一的心情が変化したととらえさせる。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>○ 「おとう、ここに…また会いに来ますから。」こう思うことによって、瀬の主を父と重ねることができたことをとらえさせる。</p> <p>○ また会いに来るとは、この海は今までのように変わらない、父のように海のいのちを守るという考えをとらえさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>太一的心情の変化を登場人物の様子や生き方と関係づけながら考えることができる。(ノート、発表)</p> </div>
まとめる	<p>4 学習のまとめをする。                  (1) 太一の成長の記録を書く。                  例「クエを海の生き物の命と思い、父や与吉じいさの生き方と重ねたことで、クエの命を守ることで一人前の漁師へと成長した太一」                  (2) 音読をする。</p>	10	<p>○ キーワードをとらえることができるように、板書を工夫する。</p> <p>○ 話し合いでの考えや意見をもとにまとめさせる。</p>

イ・ウ．人調べ（家庭学習等にて）を通して、中心人物の太一の心情の変化が分かる叙述（言葉や文）にサイドラインを引き、自分の考えを書き込ませることで、その子どもの考えを事前にとらえ、課題に迫る意図的指名に生かそうと考えた。しかし、授業の実際において座席表に子どもたちの考えを記入し、それらをつなぎ意図的指名の作戦を立てることは、教師の力量、授業力が求められることを実感する。

## 資料 2

一方、子どもたちは、課題に対する自分の考えを持ち、書くことができるようになってきた。

しかし、なかには自力で考えを書くことが難しかった子どももいたため、キーワードとなる言葉に気づかせる等の個に応じた手だてを行った。話し合い活動を充実させるためにも、一人一人に自分の考えをもたせなければならない。

## 11 成果と課題

- 中心人物の太一の成長を読み取る課題について、考えを書くこと、話し合うことの言語活動の積み重ねによって、子どもたちは自分の言葉で考えをまとめることができた。
  - ・ 太一の成長の記録例「～永遠の居所を見つけることができた太一」などさらに、「まとめ」の段階で子どもたちそれぞれが書いた太一の成長の記録を発表し合い、言葉を共有できるようにさせたい。
- 中心発問及び補助発問の精選は、子どもたちの考えに多様性を持たせるものでなければならない。そのためにも中心人物の気持ちが大きく変わる山場・クライマックスをポイントとして心情の変化を時系列にとらえたうえで、「どう変わったのか。」「なぜ変わったのか。」と、思考させる発問を考えなければならなかった。

物語の山場・クライマックスをとらえることは、場面構成「設定」「展開」「山場」「結末」を理解し、中心人物の心情が大きく変化することを読むことで主題が見えてくる。このように、教材の内容理解以上に、教材の読み方を指導しなければならないと考える。
- 話し合い活動においては、話し合う視点を明確にしたうえで、意図的指名によって子どもたちの考えをつなげたり広げたりする工夫が必要であった。また、多様な意見や考えを導き出すために、予想や既習内容等のズレを明確にした発問を吟味しなければならない。
- 挙手はしなくても考えをもっている子どもを意図的指名によって、自分の考えを友達に伝え合うことができると考えたが、それでも一人一人が自分の考えを話し、相手の考えを聞くというまでは至らない。言語活動の充実という点からもペアやグループという学習形態において、一人一人の考えを伝え合う場を設定することも必要であると考えた。
- 言語活動の充実を図るために、授業における子どもたち一人一人の「話す」「聞く」「書く」「読む」活動を位置づけた。単元において、教材で学んだ読み方を活用して他の作品を読み比べる等の言語活動を位置づける単元構想を考えることで、さらに子どもたちの思考力・判断力・表現力を伸ばすことができるのではないかと思う。